

1928年中頃から1932年における 魯迅翻訳のソ連文学覚え書（上）

中 井 政 喜

I. はじめに

II. 革命文学論争において魯迅が批判された課題

III. ソ連の同伴者作家の小説とプロレタリア作家の小説の翻訳

一、同伴者作家の小説の先行的翻訳

1、実際の作品を翻訳することについて

2、「人生のための文学」の流れの中の位置づけ（以上、今号）

3、ロシア十月革命に対する懐疑と冷笑的態度

二、ソ連のプロレタリア文学への共感

IV. さいごに

I. はじめに

1923年から25年頃のソ連の文芸論争における、同伴者作家¹に対する評価と対応の問題について、1928年、29年における魯迅は、「蘇俄的文芸政策」²を翻訳して紹介した。この文芸政策に関する問題について魯迅は、『ナ・ポストウ』派の考え方からは遠く、ヴォロンスキー、トロツキー、ルナチャルスキー等の考え方に近かったし、同時にその考え方に共感していたと思われる³。

それ以後魯迅はさらに、ルナチャルスキーやプレハーノフ等の著作における、マルクス主義文芸理論の文芸固有の分野、芸術論の分野について翻訳を進めた。

これと同時に魯迅は（同伴者作家に対する評価と対応というソ連の文芸政策に関わる理論的問題の評価とは別に）、1928年中頃以降において、同伴者作家の小説を翻訳しはじめ、1930年前後から『ナ・ポストウ』派の小説（無産階級革命文学、すなわちプロレタリア文学）も翻訳しはじめる⁴。魯迅はプロレタリア文学の『毀滅』（ファジェーエフ作、魯迅訳、上海大江書舗、1931・9）⁵を自ら訳し、『鉄流』（セラフィモヴィチ作、曹靖華訳、三閑書屋、1931・11、『鉄流』編校后記、魯迅、1931・10・10）の翻訳の完成を喜んでいる。1930、31、32年に魯迅は、同伴者作家の文学とプロレタリア文学の両者を並行して翻訳し、その後、同伴者作家の作品を集めた『豎琴』（良友図書公司、1933・1）、およびプロレタリア文学の作家を中心とする『一天的工作』（良友図書公司、1933・3）を出版した。

1928年中頃以降1932年にかけての、こうした経過を調べると、魯迅は、ソ連の過渡期における同伴者作家の作品を先行して翻訳しつつ、1930年頃以降1932年にかけて少しずつ無産階級革命文学（プロレタリア文学）に対する共感を強め、その翻訳に関心を深めていくように、私には思われる。

この小論は、次の点を課題とする⁶。

①魯迅は、1928年中頃以降、先行して同伴者作家の作品を翻訳した。その後、1930年頃以降1932年にかけて、同伴者作家の小説とプロレタリア作家の小説を並行して翻訳する。この経過をふまえて、次のような解釈は可能であろうか。この経過の中で、魯迅はソ連のプロレタリア文学に対する共感・関心を強めていった、という可能性である。

②もしそのように言えるとすれば、1928年中頃以降1932年にかけて、魯迅はどのような理由から、ソ連のプロレタリア文学に対する共感を強め、関心を深めていくようになったのだろうか。

③また、1932年頃、ソ連の同伴者作家の小説とプロレタリア作家の小説に対する魯迅の評価は、どのようなものであったのだろうか。

この場合私は、1928年頃から1932年頃にかけて、ソ連の文学作品に対する魯迅の評価の深化、そしてマルクス主義文芸理論の受容による魯迅の評

価の深化を、基本的に時間軸に沿って解釈する。

また上の課題を追究するうえで、次の二つのことを区別しておく。すなわち、すでに1917年ロシア十月革命が実行され、ソビエト政権が成立して過渡期にあるソ連の状況下での、同伴者作家の小説とプロレタリア作家の小説に対する魯迅の評価は、一つの問題である。他方、中国における、国民党政府が左翼文学に対して過酷な弾圧を行う状況下での、左連（1930年3月成立）の活動に結集した、「同伴者作家」（小資産階級作家）の小説と中国革命文学派の「無産階級革命文学（プロレタリア文学）」の小説に対する魯迅の評価は、また別の問題であったと思われる。私は、こうした状況と内容の違いに留意しながら、小論を進めることにする⁷。

Ⅱ．革命文学論争において魯迅が批判された課題

1928年1月頃から、①中国革命文学派（第三期創造社、太陽社の成員を中心とする。中国の無産階級革命文学を、すなわちプロレタリア文学を主張した）は今後、中国変革のためには無産階級に依拠しなければならないとし、階級論の立場に立って革命文学（無産階級革命文学）を主張した。同時に、現状規定論の立場に立ち、情勢に遅れた小資産階級作家として魯迅・周作人等を全面的に批判した。また、②中国革命文学派は魯迅・周作人を人道主義者として批判し、中国革命文学派の理論家馮乃超は人道主義を全面的に否定した。

1928年、中国革命文学派から突きつけられた、こうした課題を解決するための作業の一つとして、過渡的知識人魯迅はソ連の文芸論争を翻訳し検討しはじめたと思われる。魯迅は先ず、「蘇俄的文芸政策」（前掲）を翻訳し、「労働者階級文学の大本营ロシア」（『奔流』編校后記（1））、1928・6・5、『集外集』）における論争と理論を紹介した。

中国革命文学派によって突きつけられた上の二つの問題について、魯迅は基本的にブレハーノフやヴォロンスキー、トロツキー、ルナチャルスキーの見解によって理論的に解決していったと考える。この点について、

次に簡単に言及する。

一、中国革命文学派による小資産階級作家としての魯迅批判について
新旧文学の継承の問題について、プレハーノフの見解は、『蘇俄的文芸論戦』（任国楨訳、北京北新書局、1925・8、「『蘇俄的文芸論戦』前記」〈魯迅、1925・4・12〉）所載のヴォロンスキーの論文「認識生活的芸術与今代〔生活認識としての芸術と現代——中井注〕」においてすでに紹介されていた。

ヴォロンスキーは、チュジャーク（「レフ」）による旧文芸に対する全面的否定を批判して、ゴーゴリの『死せる魂』を念頭において次のように言った。

「もしも旧文芸が受動的観賞的無意識的であるものなら、その旧芸術は人に行為や奮闘を呼び起こすことはありえない。しかし、帝政の専制と奮闘し、暗黒の腐敗のロシアと奮闘することにおいて、旧芸術には人を敬服させる堂々たる偉大な功績がある。」（「認識生活的芸術与今代」）

またヴォロンスキーはプレハーノフの見解を引用しつつ次のように言う。

「プレハーノフは、新文学が旧文学に反対するのは自然のことであり、不可避なことである、と理解していた。これは事実からもそうなのである。しかし反対には限度が必要であり、決して極端ではない。慎重に境界線を引き、何を採用すべきで、何を排斥すべきか、を知らなければならない。前代の文学から新生した文学は、その必要条件（自己の将来における発達ののための）を採り、新文学はその無用なしかも有害な古い遺産を排斥しなければならない。」（「認識生活的芸術与今代」）

魯迅は『『奔流』編校后記（1）』（1928・6、『集外集』）で次のように言う。

「ロシアの文芸に関する論争は、以前『蘇俄的文芸論戦』で紹介されたことがある。ここの『蘇俄的文芸政策』は、實際上その続編と見なしてさし

つかえない。」

「蘇俄的文芸政策」(前掲)で、ヴォロンスキー、トロツキー、ルナチャルスキー等は、無産階級革命文学(プロレタリア文学)を支持しながら、他方、旧知識人として革命を受け入れた同伴者作家の文芸を、すなわち小資産階級作家(或る場合は資産階級や貴族出身)の、1920年代半ば頃隆盛していた文芸を、当時のソ連の文芸界の衰退した現状に基づいて擁護した。

それに対して、『ナ・ポストウ』派の理論は、1923年頃から、無産階級革命文学(プロレタリア文学)の育成と発展を主張して、①当時隆盛していた同伴者作家の文学を階級的見地から厳しく批判し、②その隆盛にソ連文学界の危機を見て、文学界に対するロシア共産党の直接的な政策的行政的介入を要求するものであった。

こうした理論的論争に対して、1925年の「文芸の領域における党の政策について——ロシア共産党中央委員会の決議——」(1925・6・18、『プラウダ』『イズヴェスチャ』、1925・7・1、「蘇俄的文芸政策」に訳載)が決着をあたえた。この決議はルナチャルスキーが中心となって作成したもので⁸、その後1928年末頃まで、ソ連文学界を導く政策となった。魯迅はこの論争に対するロシア共産党中央委員会の決議の理論的内容に納得していたと思われる。

このロシア共産党中央委員会の決議には次のような内容があった。ロシア共産党はプロレタリア作家、プロレタリア農民作家を支持し、同伴者作家を援助する。そのうえで、文芸領域上の問題・傾向について、ロシア共産党はその直接の政策的行政的干渉を認めず、文芸諸団体間の自由な競争と議論に任せる、とした。(第13項、第14項)

以上のような意味で、中国革命文学派による小資産階級作家としての魯迅に対する全面的批判に対して、魯迅は、新旧文学の継承の観点から、また1910年代、20年代の中国の時代状況に対する小資産階級作家としての批判的リアリズムの立場に立って(ゴーゴリの文学の果たした役割のよう

に)、中国の小資産階級作家の文学(中国の五四期以来の「新文学」)の価値を認めることができたと思われる。

二、中国革命文学派による人道主義者としての鲁迅批判について

中国革命文学派の馮乃超は「芸術与社会生活」(1927・12・18、『文化批判』第1号、1928・1・15)において、トルストイと人道主義を全面的に否定した⁹。馮乃超は、トルストイの思想が、社会進歩の観点においても、また歴史の進行の観点から見ても、反動的であるとした。そして中国において人道主義的考え方をとる鲁迅・周作人等を批判した。

しかしルナチャルスキーは、「TOLSTOI与 MARX」(盧那卡尔斯基[ルナチャルスキー——中井注]、1924年の演説、『奔流』第1巻第7、8期、1928・12・30、1929・1・30、のちに『文芸与批評』に所収、底本は『トルストイとマルクス』〈金田常三郎訳、原始社、1927・6・20、鲁迅入手年月日、1927・12・14〉)で以下のように指摘する。

ルナチャルスキーは、人道主義の理想(ルナチャルスキーの「人間の自然の性質」)を、現実の社会で実現しうるものが、ほかならぬ社会主義・共産主義であると指摘する。ルナチャルスキーは、中国革命文学派の馮乃超のように、人道主義を、そして「人道主義的な美しい話」(「芸術与社会生活」)を、社会主義・共産主義と対立させて、頭から否定するのではなかった。ルナチャルスキーは、人道主義の理想が、将来、社会主義・共産主義の社会においてこそ実現されるとした。すなわちルナチャルスキーは人道主義の理想を否定せず、人道主義の空想的理想を現実を実現するものこそ、社会主義・共産主義の社会であるとする。

ルナチャルスキーは1920年代中頃の当時の世界において、ソ連の知識人階層は二つの水路に分裂しているとする。一つは共産主義の方向に向かい、プロレタリアートと結合して、人間生活の合理的組織へ向かって進み、正当な経済組織を実現しようとして闘おうとする。もう一つはトルストイ主義者の道である。トルストイの社会的理想は、キリスト教的なもの

であって、各人は何人をも苦しめず、富貴を志さず、自分の生存以外には目的がなく、自らの労働によって生きる。そしてトルストイ主義者は流血の惨事を恐れ、聖者の道を探ろうとする。闘争から離れ、自らのうちに神を見出そうとする。それゆえに、ルナチャルスキーは、トルストイ主義者の目を現実に開かせるように努力し、社会闘争の中に身を突入させることが重要であるとする。ルナチャルスキーは、トルストイ主義者が自分の純潔を守ろうとして、身を汚すことを嫌い、それゆえになんらの愛の事業をなしえないこと、その事業がほとんど言葉のうえのものとして止まるだけであること、を指摘する。すなわちルナチャルスキーは、人道主義の理想を現実の社会において実現するために、その実現の過程において社会的に闘うことが必要であるとした。そしてルナチャルスキーはトルストイの無抵抗主義がその理想の実現のために障害になるとした。

ルナチャルスキーは、上のようにトルストイ主義者（知識人）の無抵抗主義を批判しながらも、しかしなお当時のソ連の現実にとって、すなわちこれから社会主義・共産主義の実現をめざすソ連の過渡時期において、トルストイ主義者（知識人）の協力が重要であり、不可欠であるとしている。

1928年の後半、魯迅はこうしたルナチャルスキーの考え方をを知ることをつうじて、人道主義の理想を社会変革の過程と結びつけることができたし、また人道主義の理想を実現するためには、社会的に戦うことが必要であることを改めて認識したと思われる¹⁰。

Ⅲ. ソ連の同伴者作家の小説とプロレタリア作家の小説の翻訳

魯迅は上のように、中国革命文学派の魯迅に対する激しい批判の諸点を、ソ連の文学界の状況、理論をとおして検討し、それに反駁した。またブレハーノフ、ルナチャルスキーの諸本の翻訳を通して、マルクス主義文芸理論の文芸固有の領域に対する自らの理解を深めていった。

同時に、1928年中頃以降1932年にかけて、魯迅は自らソ連文学界の実際の動向、すなわち同伴者作家の作品と、プロレタリア文学の作品の両者を

翻訳し、紹介しはじめる。それはソ連文学界の実際を知ろうとする魯迅の意図に基づくと思われる。その翻訳は、ソ連の諸作家がロシア十月革命とその過渡時期に対してどのような見方と姿勢をもっていたか、もっているか、をも魯迅に教えたと思われる。

私は、ロシア十月革命後の、プロレタリアートの執権するソ連の過渡時期におけるそれらの文学作品が、十月革命に対してどのような評価をしていたのか、ソ連の過渡時期に対してどのような考え方を表しているか、を中心に着目して検討することにする。

一、同伴者作家の小説の先行的翻訳

1、実際の作品を翻訳することについて

対立する両者の事実と内容をよく把握し、そのうえで自分の判断を形成することは、魯迅が重視していたことであった¹¹。また魯迅は、様々な文学思潮の名前だけではなく、その実際を知ることの重要性を指摘した。魯迅は「『現代新興文学的諸問題』小引」(1929・2・14、『訳文序跋集』、『魯迅全集』第10巻、1981)で次のように言う。

「これを翻訳した意図については、極めて簡単なことである。新思潮の中国に入るや、いつも幾つかの名詞があるのみである。主張する者はこれで敵を呪い殺せると思いこみ、敵対者も呪い殺されるだろうと思ひこんで、半年一年わめきたてて、結局煙火のように消え失せる。例えばロマン主義やら自然主義、表現主義、未来主義は……みな過ぎ去ったかのであるが、実際のところ出現したと言えるであろうか。今この一篇を借りて、理論と事実とを見て、必然の勢いの実現することは平常のことであって、空騒ぎや禁圧はともに役に立たないことが分かれば、先ず外国の新興文学をして必ずや中国における『符牒』の風から脱却せしめるだろう。それでこそ後に続く中国の文学には新興の希望がある。」

魯迅は、ソ連の同伴者作家の小説とプロレタリア文学の小説の両者を実際に翻訳し紹介することをつうじて、両者に対する理解を深め、自分なり

の評価をもとうとしたと思われる。そのとき、1928年、29年に先ず翻訳されたのは、同伴者作家の文学であった。プロレタリア文学（無産階級革命文学）は1930年前後から翻訳される¹²。

それ以前の1926年において、魯迅は『文学と革命』（トロツキー著、茂森唯士訳、改造社、1925・7・20、魯迅入手年月日、1925・8・26）の第三章「アレクサンドル・ブロック」を翻訳し、それを詩『十二個』（胡敦訳、北京北新書局、1926・8）の本文の前に無署名で付け、また『『十二個』后記』（1926・7・21、『十二個』〈前掲〉所収、『集外集拾遺』）を書いた。魯迅は、ソ連の過渡時期における旧知識人（アレキサンドル・ブロックという同伴者作家）の前進と苦悩に対する共感を表している¹³。魯迅は中国の国民革命の高揚時期において、1926、27年、過渡的知識人としての自らの生き方を模索した。ソ連の過渡時期において自死した同伴者作家、エセーニン（1895－1925）とソーボリ（1888－1926）に、魯迅は1927年に言及する¹⁴。

魯迅は、同伴者作家ブロックが「革命に向かって突進した。しかし振り返った、そこで負傷した」（『『十二個』后記」、1926・7・21）という、ソ連の過渡期知識人の苦悩と挫折に対する共感を、1926年頃から1928年はじめ頃にかけて持続させていたと思われる。

「革命時代には萎縮する文学者が必ず多くいる。また、山くずれ、地しずむような新しい大波に向かって突き進み、そこでそのまま呑みこまれ、或いは負傷する文学者も多くいる。呑みこまれたものは消滅してしまう。負傷したものは生きつつ、自分の生活を切り開きつつ、苦痛と愉悅の歌を歌う。」（『馬上日記之二」、1926・7・7、『華蓋集続編』）

そして実際に十月革命が実行された後の、プロレタリアートの執権する過渡時期においての、その地での、同伴者作家の小説の作品がどのようなものであり、どのような意義をもっていたのか、を認識するために、1928年中頃から、先ず同伴者作家の翻訳に着手していると思われる。そこには、同伴者作家の「人生のための文学」の姿勢に対する共感もあったと思われ

る^{*15}。

このとき、魯迅がソ連の文学を手探りしつつ、読み進めるにあたって、同伴者作家については、『労農露西亞小説集』（米川正夫訳、金星堂、1925・2・15、魯迅入手年月日、1927・10・12）とその「解説」（米川正夫著）、『芸術戦線』（尾瀬敬止^{おせけいし}訳、事業之日本社出版部、1926・6・1、魯迅入手年月日、1927・10・31）等が参考にされたと思われる^{*16}。また1930年頃、プロレタリア文学を含めて一つの有力な全体的な解説を与えたのは、ロシア革命後の10年間の文学を論じる、ソ連のコーガン教授（1872－1932）の『偉大なる十年の文学』（日本語訳は、『ソヴェート・ロシア文学の展望』、ペ・エス・コーガン著、黒田辰男訳、叢文閣、1930・5・25、魯迅入手年月日、1930・5・30^{*17}）であった、と思われる^{*18}。

1928年以降、魯迅が訳した小説の一つには、同伴者作家ヤコヴレフ（1886－1953）の「農夫」（『大衆文芸』第1巻第3期、1928・10、『魯迅訳文全集』第8巻、福建教育出版社、2008・3）がある。「農夫」は、第一次世界大戦のとき、オーストリア軍との戦いに参加した一人の農夫出身のロシア兵士を描く。彼は独りでの斥候を命じられ、前線の丘の様子を探りに行く。丘の上には、一人の敵兵が大きないびきをかいて熟睡していた。斥候の兵士は敵兵の銃と背囊を取りあげると、なお熟睡する敵兵をそのままにして帰還する。兵士は隊長に銃と背囊を渡して、丘の様子を報告し、一人の敵兵が熟睡していたために、その敵兵を殺すことなく帰還したと言う。そこには、農夫の真っ正直な、温厚で、愚直な人間性が見られる。魯迅は、ヤコヴレフが「人類の良心」（『十月』后記、1930・8・30、『訳文序跋集』）の勝利を描いていると言う^{*19}。

魯迅は、『農夫』訳者附記（1928・10・27作、月刊『大衆文芸』第1巻第3期、1928・11、『訳文序跋集』）で次のように言う。

「この一篇は、日本の『新興文学全集』第24巻岡沢秀虎の翻訳から重訳したものである^{*20}。全巻の中で、これが最も良いというのではない。篇幅が比較的短く、翻訳に多くの時間を必要としないためであり、第二に、みん

ながロシアのいわゆる〈同伴者作家〉なるものを見て、その書くものがどのような作品であるかを、見ることができるためにすぎない。」(『農夫』訳者附記、前掲)

これより少し前に翻訳されたゾシチェンコ(1895－1958、同伴者作家)の小説「貴家婦女」(淑雪兼珂、『大衆文芸』第1巻第1期、1928・9・20、『魯迅訳文全集』第8巻、前掲、『芸術戦線』、尾瀬敬止訳、前掲)は、十月革命直後にソビエト政府の小役人が没落貴族の貴婦人と近づきになり、彼女に肉まんを一個余分に食べさせるお金にも窮迫するという社会風俗を、風刺的に描いたものである。

その後、次々と翻訳された同伴者作家の小説はおおむね、同伴者作家の一つの指標とされる、「生活の現実に対するこの無意志性」(『関于綏蒙諾夫及其代表作『飢餓』』、黒田辰男著、魯迅訳、1928・10・2、『北新』第2巻第23号、1928・10)が見られた。或いはザミャーチンのように、十月革命後の社会状況に対する「旧知識人階級特有の懷疑と冷笑的態度」(『堅琴』后記、1932・9・10、『堅琴』〈良友図書公司、1933・1〉、『訳文序跋集』)が見られたり、或いはピリニャークのように、いつも「冷評の氣息」(『苦蓬』訳者附記、1929・10・2、『訳文序跋集』)を感じさせるものもあった。1928年、ヤコブレフの「農夫」の人道主義について魯迅は、農夫の温厚さは革命においてであれ、反革命においてであれ、必ず失敗するとする²¹。また1932年、魯迅は、ヤコブレフの「窮苦の人們」(『堅琴』所収)において描かれる、下層の人々がお互いに助けあい慈しみあう精神について、作者の想像の産物であるとする²²。

2、「人生のための文学」の流れの中の位置づけ

魯迅は、1932年の『「堅琴」前記』(1932・9・9、『訳文序跋集』)でソ連の同伴者作家を「人生のための文学」の流れの中に位置づけ、おおむね次のように言う。

ロシアの文学は、ニコライ2世(在位、1894－1917)のときから、その主

流は人生のための文学であった。この思想は、中国においては上海の文学研究会によって紹介され、文学研究会の成員はドストエフスキー（1821－1881）、ツルゲーネフ（1818－1883）、トルストイ（1828－1910）、チェーホフ（1860－1904）等を被圧迫者のために呼びかける作家と考えた。しかしこれらは本来、無産階級革命文学とはほど遠く、そのため翻訳された作品は、たいてい叫喚、呻吟、困窮、辛酸を描き、たかだか少しく抵抗するにすぎなかった。

人生のための文学はロシアで、突然凋落していった。それ以前に、元もと多くの作家は転換することを希望していたが、1917年ロシア十月革命は、彼らに予想外の巨大な打撃を与えた。目につく新しい人物も現れず、国内戦争と列強の封鎖の中で文壇は、萎縮と荒涼が見られるのみであった。1921年頃になって、新経済政策が実行され、製紙、印刷、出版等の事業が勃興し、文芸の復活を助けた。このとき最も重要な中心となったのは、文学団体「セラピオン兄弟」である。その立場は一切の立場の否定にあった。「セラピオン兄弟」の成員ゾシチェンコは言う。

「党員の観点から見れば、私は宗旨のない人間である。（中略）おそらく私と最も近いのは、ボリシェビキであって、彼らとともにボリシェビキ化することに、私は賛成だ。……しかし私は農民のロシアを愛する。」

この文学団体「セラピオン兄弟」はまもなく全国の文壇を席卷した。ソ連の中で、このような非ソビエト文学が勃興した理由は次のようである。第一に、当時の革命者は実行に忙しく、ただこれらの青年文学者だけが比較的優秀な作品を発表した。第二に、彼らは革命者ではないけれども、身をもって鉄と火の試練を体験し、そのためおよそ描く恐怖や戦慄、興奮と感激は読者の共鳴を得やすかった。第三に、当時文学界を指導したヴォロンスキーは、彼らを大いに支持した。トロツキーもその一人で、これを「同路人」（同伴者作家のこと）と称した。しかし「セラピオン兄弟」はたんに「文学を愛する」と言うだけで明確な意識形態の標識がなく、ついにはだんだんと団体としての意義を失い、ちりぢりになり、次いで消滅した。後

にはほかの同伴者作家たちと同様に、それぞれ個人の力量で、文学上の評価を受けている。

四五年前（1927年、28年頃）、中国ではかつて盛んにソ連文学を紹介した。しかしそれはこの同伴者作家の作品が多数を占めていた。第一に、この種の文学が興ったのは比較的先で、西欧や日本で紹介称賛されて、中国にも重訳される機縁があった。第二に、おそらくやはりこうした立場のない立場が、かえって紹介者の評価を得やすかったためである。

魯迅は、おおむね、以上のように述べる。魯迅の上の『『豎琴』前記』（1932・9・9、前掲）の記述からすれば、次のことが言える。

①1932年の段階で魯迅は、ロシアの伝統的な人生のための文学が、1917年の十月革命以後において、その一つの支流として、同伴者作家の文学として出現した、と理解している。すなわちソ連の過渡時期に、旧知識人なりに革命を受け入れた同伴者作家の文学は、ロシアの伝統的な人生のための文学の一つの支流として現れている。

②同伴者作家の団体「セラピオン兄弟」は明確な意識形態の標識がなく、文学を愛するというにすぎない。そのため、1932年当時において、「セラピオン兄弟」はすでに消滅し、そのほかの同伴者作家たちと同様に、それぞれの個人の力量によって、文学上の評価を受けるようになっているとする。

1932年の段階で、魯迅は、一方で同伴者作家を人生のための文学の一つの支流として認識しながらも、他方で、ソ連の過渡時期において同伴者作家に明確な意識形態のない欠点が指摘され、当時において、たんに個人として文学上の評価を受けるにとどまるとする。

すなわち魯迅は、人生のための文学の一支流としてソ連の同伴者作家の文学に対して、1928年中頃以降、ソ連の過渡時期におけるその意義を模索し検討したと言える。1930年頃には、魯迅は中国の将来において、革命に幻想を抱き、革命の現実につまずきかねない旧知識人（同伴者作家）の存在の可能性を指摘している²³。そして1932年において、ソ連の過渡期にお

ける同伴者作家の文学は明確な意識形態の標識がないがゆえに、個人の文学的力量で評価されるようになっていくことを指摘する。

*1: ロシア十月革命を自己流に受け入れた旧知識人系の作家、すなわちロシア十月革命に反対しない、小資産階級・資産階級の作家、プリニャーク等を指す。トロツキー(『文学と革命』)の命名に由来する。魯迅は、『『豎琴』前記』(1932・9・9、『豎琴』、良友図書公司、1933・1)で次のように言う。

「〈同伴者作家〉とは、革命に含まれる英雄主義のために革命を受け入れ、ともに前進する。しかし徹底して革命のために闘争し、たとえ死んでも惜しくないという信念はもっていない。たんにしばらくのあいだ道を同じくする道連れにすぎない。この名称は、そのときからずっと現在まで使われている。」

*2: 「蘇俄的文芸政策」は『奔流』第1巻第1期(1928・6・20)から同第2巻第5期(1929・12・20)まで断続的に翻訳された。後に『文芸政策』(水沫書店、1930・6)として出版された。

*3: 「魯迅翻訳の『蘇俄的文芸政策』に関するノート(上)」(中井政喜、『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第44号、2013・2・1)、「魯迅翻訳の『蘇俄的文芸政策』に関するノート(下)」(中井政喜、『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第45号、2013・8・1)で「蘇俄的文芸政策」に触れた。

そのほかの問題について言えば、トロツキー、ヴォロンスキーが、ソ連の過渡期において、プロレタリア文化・芸術の不成立論を唱えたことに対して、ルナチャルスキーはこの論に反対している。

*4: 「革命後のロシア文学概観」(岡沢秀虎、『ソヴェート・ロシア文学理論』、神谷書店、1930・2・1)によれば、『ナ・ポストウ』派の散文の代表を次のように指摘する。

「散文の方面にも、〈同伴者〉に劣らぬ人材が現れて来た。彼等は同じく革命の現実を描いても、前衛の目から見たそれである。そこには絶対的な優勢があった。この方面では、セラフイーモイッチの『鉄の流れ』リベディンスキイの『一週間』『コムミサル』グラトコフの『セメント』フルマーノフの『チャパーエフ』マラーシキンの『ダニールの没落』ファデーエフの『壊滅』等が注目すべき作品である。」

*5: 『萌芽月刊』(『左連機関刊物四種』全8冊、国家図書館出版社、2011・1)、『魯迅著訳系年目録』(上海文芸出版社、1981・8)によれば、『潰滅』(第1部、

第2部)は、『萌芽月刊』第1巻第1-5期(1930・1・1-5・1)、『新地月刊』(1930・6・1、すなわち『萌芽月刊』第6期)に掲載される。そのときの題名は、『潰滅』である。出版禁止にあい、第2部までが発刊される。私の使用した底本は、『魯迅訳文全集』第5巻(福建教育出版社、2008・3)に所収される『毀滅』(第1部、第2部、第3部)である。これは三閑書屋版(1931・10、再版)の『毀滅』を底本とする。「漫話魯迅的『毀滅』訳本」(張小鼎、『魯迅著作版本叢談』、書目文献出版社、1983・8)は次のように説明する。大江書舗版『毀滅』(1931・9、初版)は、当局の圧迫を避けるために、「作者自伝」、「関于『毀滅』」、「代序」、「訳者后記」を取り除き、本文だけを印刷して、訳者名も「隋洛文」とした。それでもこれは発禁処分となった。そのため魯迅は、三閑書屋版でそれらすべてを復活させ、訳者名を「魯迅」として、自費出版した。その初版、再版のときの書名が『毀滅』である。小論では、『毀滅』の書名を用いる。『萌芽月刊』に掲載された題名は、『潰滅』を用いる。

*6: 私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語参考文献〕

- ①「魯迅論蘇聯“同路人”及其文学」(沈棲、『魯迅研究(双月刊)』、1983年第4期)
- ②「漫話魯迅的『毀滅』訳本」(張小鼎、『魯迅著作版本叢談』、書目文献出版社、1983・8)
- ③「魯迅对“同路人”文学的訳介及其与中国革命文学の關係」(黎舟、『魯迅与中外文学遺産論稿』、海峡文芸出版社、1985・10)
- ④「魯迅論『毀滅』」(黎舟、『魯迅与中外文学遺産論稿』、海峡文芸出版社、1985・10)
- ⑤「盜取“天火”。托尔斯泰和入道主義。“同路人”。『奔流』的誕生」(林賢治、『人間魯迅』下、花城出版社、1998・3)
- ⑥「『上海文芸之一瞥』与『創造十年』。才子加流氓論。『十月』:『毀滅』:『鉄流』」(林賢治、『人間魯迅』下、花城出版社、1998・3)
- ⑦「理智審視同感情擁抱の合与離——对魯迅与前蘇聯文学關係的理解」(李春林、『社会科学輯刊』2001年第5期、2001・9)
- ⑧「魯迅与蘇聯“同路人”作家關係研究(一)(二)(三)」(李春林、『魯迅研究月刊』)2003年第2期、第3期、第4期
- ⑨「魯迅、曹靖華与蘇聯文学」(李今、『三四十年代蘇俄漢訳文学論』、人民文学

出版社、2006・6)

⑩「“同路人”文学」(顧鈞、『魯迅翻訳研究』、福建教育出版社、2009・4)

⑪「作為革命“同路人”的魯迅」(趙歌東、『啓蒙与革命 魯迅与20世紀中国文学の現代性』、中国社会科学出版社、2011・10)

〔日本語参考文献〕

①「“同伴者作家”と魯迅」(丸山昇、『現代中国』第37号、1962・2、底本は『丸山昇遺文集』第1巻、汲古書院、2009・7・7)

②『魯迅目録書目 日本書之部』(中島長文編刊、1986・3・25)

*7: 私は、ソ連の1920年代頃の文学史について、「ロシア・ソヴェト文学」(『増補改訂 新潮世界文学辞典』、新潮社、1990・4・20)の記述を参考とする。

「〔ソヴェト時代〕十月革命(1917)と共に旧文学者の一部は海外に亡命し、あるいは沈黙して、ソヴェト文学は最初から特定の政治的色彩をもった文学として出発した。作家の出身によってプロレタリア作家と旧知識人系の〈同伴者作家〉を区別する習慣も30年代初めまで続く。「だが、こうした政治的空気の中でも、20年代の文学はかなり自律的な道を歩んだ。(中略)文学団体も大幅に認められ、〈立哨中〉やラップ(ロシア・プロレタリア作家協会)の側からの政治的攻撃にもかかわらず、非政治主義の〈セラピオン兄弟〉(中略)などが独自の主張をかけた。共産党も25年の中央委員会決議では、『文学における自由競争』の原則を打ち出している。(中略)30年前後になると、(中略)〈同伴者作家〉も、社会主義建設をテーマにリアリズムの作品を書くようになり、(中略)プロレタリア文学系作家と方法的に接近する。この状況に基づいて、32年に文学団体の解散が決定され、つづいてゴーリキーらの指導下に34年のソ連作家同盟設立、基本的創作方法としての社会主義リアリズムの承認へと文学界の再編成が進む。しかし30年代後半に入ると、作家同盟は官僚機構化し、粛清の恐怖のもとで文学、芸術への露骨な干渉が行われ、社会主義リアリズムはドクマと化する。」(江川卓著、1462頁-1463頁)

*8: 「解説」(藤井一行、『芸術表現の自由と革命』、ルナチャールスキー著、藤井一行編訳、大月書店、1975・5・28)は次のように指摘する。

「この中央委員会決議の作成にはルナチャールスキー自身が重要な役割を果たしている。彼は党の政治局が選任した決議作成委員会の責任者をつとめたのである(なお、決議の草案とみられるルナチャールスキーの手になる文書も残ってい

る)。」

*9：私は、「人道主義」と「トルストイの人道主義」、「トルストイ主義者の人道主義」の三者を区別する。①「人道主義」を広義の意味で解釈し、それは人間愛を根本とし、人間性を束縛し抑圧するものからの人間の解放を目指すものとする。②「トルストイの人道主義」と③「トルストイ主義者の人道主義」は、広義の人道主義の中のそれぞれ一類型と考える。

*10：この点に関して、「魯迅訳盧那卡尔斯基作品札記——関于人道主義」（『国際魯迅研究』第3輯、黎活仁編、2014年1月投稿、未刊行。『現代の日本における魯迅研究』〈『言語文化叢書22』、秋吉收編、九州大学大学院言語文化研究院、2016・3発行予定）所収）で述べたことがある。

*11：魯迅は「文学的階級性」（1928・8・10、『三閑集』）で次のように言う。

「私は、世界ですでに定評のある唯物史観に関する数冊の本——少なくとも、簡単に平明な一冊、精確緻密な二冊——をすすんで翻訳しようという堅実な人のいることを、希望しているにすぎません。それから一、二冊の反対する著作も欲しい。そうなれば、論争が起こっても、たくさん話を省略することができます。」

*12：翻訳がどのように進化したのかを、『魯迅著訳系年目録』（上海文芸出版社、1981・8）に主として従い、図表で示すと以下のとおりである（関連する文献の一部も掲載している）。

プロレタリア文学 (無産階級革命文学)	同伴者作家の小説	人生のための文学 (ロシア十月革命以前の批判的リアリズムの文学)
【1928年】		
	「貴家婦女」、淑雪兼珂、 (ゾシチェンコ、1895－1958)、『大衆文芸』第1巻 第1期、1928・9・20 「農夫」、1928・10・27 訳、雅各武葉夫(ヤコブレフ、1886－1953)、『大衆文芸』第1巻第3期、 1928・11・20、『訳叢補』	

	<p>「『農夫』 訳者附記」、1928・10・27、雅各武菜夫、『大衆文芸』第1巻第3期、1928・11・20、『訳叢補』</p> <p>「在沙漠上」、1928・11・8前訳、倫支(ルンツ、1901－1924)、半月刊『北新』第3巻第1期、1929・1・1、『豎琴』</p> <p>「『在沙漠上』 訳者附記」、1928・11・8前訳、半月刊『北新』第3巻第1期、1929・1・1</p> <p>「豎琴」、1928・11・15訳、理定(リージン、1894－1979)、『小説月報』第20巻第1期、1929・1・10、『豎琴』</p> <p>「『豎琴』 訳后附記」、1928・11・15、理定、『小説月報』第20巻第1期、1929・1・10、『豎琴』、『訳文序跋集』</p> <p>「果樹園」、1928・11・20訳了、斐定(フェージン、1892－1977)、『大衆文芸』第1巻第4期、1928・12・20、『豎琴』</p> <p>「『果樹園』 訳后附記」、1928・11・20、斐定、『大衆文芸』第1巻第4期、1928・12・20、『豎琴』</p>	
--	---	--

【1929年】		
	<p>『十月』(第1節－第3節)、1929・1・2訳、雅各武萊夫。第1節－第2節、『大衆文芸』第1巻第5期、1929・1・20。第3節、『大衆文芸』第1巻第6期、1929・2・20。 全書、1930・8・30訳了。</p> <p>「『十月』 訳后附記」、1929・1・2、『大衆文芸』第1巻第5期、1929・1・20。『訳文序跋集』</p> <p>「波蘭姑娘」、淑雪兼珂、『近代世界短篇小説集』(1)『奇剣及其他』(朝花社、1929・4)</p> <p>「青湖紀游」、確木努易(拉扎列夫、1863－1910)、1929・9・27訳、『訳叢補』</p> <p>「苦蓬」、1929・10・2訳了、畢力涅克(ピリニャーク、1894－1941)、『東方雜誌』第27巻第3号、1930・2・10、『一天的工作』</p> <p>「『苦蓬』訳訖記」、1929・10・2、『東方雜誌』第27巻第3号、1930・2・10、『訳文序跋集』</p> <p>「VI・G・理定自伝」、1929・11・18訳、『奔流』第2巻第5本、『訳叢補』</p>	<p>「『一篇很短的伝奇』 訳后附記(二)」、『近代世界短篇小説集』(1)『奇剣及其他』(朝花社、1929・4)、『訳文序跋集』</p> <p>「『悪魔』 訳后附記」、1929・12・3、半月刊『北新』第4巻第1、2期合刊、1930・1。</p> <p>「悪魔」、1929・12・3訳了、高尔基(ゴーリキー、1868－1936)、『北新』第4巻第1、2期合刊、1930・1。</p> <p>「〔契珂夫与新文芸〕、Lvov-Rogachevski、『奔流』第2巻第5本、1929・12・20、『訳叢補』」</p>

	<p>「『VI・G・理定自伝』訳語附識」、1929・11・18、『奔流』第2巻第5本、『訳文序跋集』</p>	
【1930年】		
<p>「潰滅」(第1部－第2部)、法捷耶夫(ファジェーエフ、1901－1956)、『萌芽月刊』第1巻第1期－第5期、1930・1・1－5・1、『新地月刊』(『萌芽月刊』第6期のこと)、1930・6・1</p> <p>「『潰滅』第二部－至第三章訳后附記」、1930・2・8、『萌芽月刊』第1巻第4期、1930・4・1、『訳文序跋集』</p> <p>「『静静的頓河』后記」、1930・9・16、『静静的頓河』、唆羅訶夫(ショーロホフ、1905－1984)、神州国光社、1931・10、『集外集拾遺』</p> <p>「『静静的頓河』作者小伝」、1930・9・16 訳、『静静的頓河』、神州国光社、1931・10、『訳叢補』</p> <p>「毀滅」(第三部)、法捷耶夫、1930・12・26 訳了</p>	<p>『十月』(第4－28節)、雅各武萊夫、1930・8・30</p> <p>「『十月』作者自伝」、雅各武萊夫、1930・8・30 訳了、未発表、『十月』、神州国光社、1933・2</p> <p>「『十月』后記」、1930・8・30、未発表、『十月』、神州国光社、1933・2、『訳文序跋集』</p> <p>「洞窟」、1930・11・29 訳(『魯迅日記』)、札弥亜丁(ザミャーチン、1884－1937)、『東方雑誌』第28巻第1号、1931・1・10、『堅琴』</p> <p>「『洞窟』訳訖記」、1930・11・29 (『魯迅日記』)、札弥亜丁、『東方雑誌』第28巻第1号、1931・1・10、『訳文序跋集』</p> <p>「『鉄甲列車Nr.14－69』訳本后記」、1930・12・30、『集外集拾遺補編』、伊凡諾夫(イワノフ、1895－1936)</p>	

<p>【1931 年】</p> <p>「中国無産階級革命文学和前驅の血」、『前哨』第1巻第1期、1931・4・25</p> <p>「『毀滅』后記」、1931・1・17、『毀滅』、三閑書屋再版、1931・10、『訳文序跋集』</p> <p>「『鉄流』編校后記」、1931・10・10、『集外集拾遺』、『鉄流』（綏拉菲摩維支〈セラフィモヴィチ、1863－1949〉三閑書屋、1931・11）</p> <p>「『士敏土』代序」（蘇聯、戈庚〈コーガン、1872－1932〉作）、1931・10・21 訳、『士敏土』、革拉特珂夫（グラトコフ、1883－1958）、董紹明等訳、新生命書局、1932・7。</p> <p>「父親」、1931・11・15 訳、M.峻羅訶夫、未発表、『一天的工作』</p> <p>「『毀滅』和『鉄流』の出版預告」、『文芸新聞』第37号、1931・11・23、『集外集拾遺補編』</p> <p>「《『鉄流』 図》特価告白」、1931・12・8、『集外集拾遺補編』</p>	<p>「肥料」、1931・8・9 訳、綏甫林娜（セイフーリナ、1889－1954）、『北斗』創刊号、第1巻第2期、1931・9・20、10・20、『一天的工作』</p> <p>「『肥料』 訳后附記」、1931・8・12、『北斗』第1巻第2期、1931・10・20、『訳文序跋集』</p> <p>「垂克与人性」、1931・11・4 訳、E.左祝黎（ゾズリヤ、1891－1941）、未発表、『豎琴』</p>	
--	---	--

【1932年】		
<p>「林克多『蘇聯聞見録』序」、1932・4・20、『文学月報』創刊号、1932・6・10、『南腔北調集』</p>	<p>「『豎琴』前記」、1932・9・9、『豎琴』、良友図書公司、1933・1、『南腔北調集』</p>	
<p>「革命的英雄」、1932・5・30 訳、D. 孚尔瑪諾夫（フルマノフ、1891－1926）、未発表、『一天的工作』</p>	<p>「『豎琴』后記」、1932・9・10、『豎琴』、良友図書公司、1933・1</p>	
<p>「『一天的工作』前記」、1932・9・18、『一天的工作』</p>	<p>「窮苦の人們」、雅各武萊夫、1932・9・13 前訳了、『東方雜誌』第30卷第1期、1933・1・1、『豎琴』</p>	
<p>「枯煤，人々と耐火磚」、F. 班菲洛夫（パンフォーロフ、1896－1960）、V. 伊連珂夫（イリエンコフ、1897－1967）、1932・9・18 訳了、未発表、『一天的工作』</p>	<p>「拉拉的利益」、V. 英培尔（インベル、1890－1972）、1932・9・13 前訳了、未発表、『豎琴』</p>	
<p>「我要活」、A. 聶維洛夫（ネヴェーロフ、1886－1923）、1932・9・19 前訳了、『文学月報』第1卷第3期、『一天的工作』</p>		
<p>「鉄的静寂」、N. 略悉珂（リヤシコ、1884－1953）、1932・9・19 前訳了、未発表、『一天的工作』</p>		
<p>「工人」、瑪拉式庚（マラーシキン、1888－1988）、1932・9・19 前訳了、未発表、『一天的工作』</p>		

『『一天的工作』后記』、 1932・9・19、『一天的 工作』、良友図書公司、 1933・3		
---	--	--

*13:「ブローク・片上伸と1926年～29年頃の鲁迅についてのノート（上）（下）」（『大分大学経済論集』第36巻第5、6号、1985・1・20、2・20。後に、『鲁迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第11章として収録）で触れたことがある。

*14:「在鐘楼上——夜記之二」（1927・12・17、『三閑集』）で鲁迅は次のように言う。

「私は、およそ革命以前に幻想或いは理想をもっていた革命詩人は、自分の謳歌希望した現実につづかり、死ぬ運命を確かにもつものだ、ということを知った。しかし現実の革命がもしもこの種の詩人の幻想或いは理想を破碎してしまわないのなら、この革命はまだ布告上の空談である。しかしエセーニンとソーボリはきつく非難できない。彼らは前後して自分のための挽歌を歌ったので、彼らには真実があった。彼らは自己の沈没によって、革命の前進も証明していた。」

*15: 鲁迅は、後述のように、『『豎琴』前記』（1932・9・9、『豎琴』、良友図書公司、1933・1、『南腔北調集』）で、ロシア文学の主たる性格として、「人生のための文学」を指摘している。同伴者作家たちは「人生のための文学」の潮流に属し、十月革命に突入し、十月革命によって巨大な打撃と影響を受けたとする。

*16: そのほか、前述の『文学と革命』（トロツキー著、茂森唯士訳、改造社、1925・7・20、鲁迅入手年月日、1925・8・26）は参考とされたであろう。また、『革命ロシアの芸術』（尾瀬敬止、事業之日本社出版部、1925・9・25）も参考にされたと思われる。

鲁迅は、「馬上日記之二」（1926・7・7、『華蓋集続編』）で次のように言う。

『『イワン・ダ・マリヤ』『『芸術戦線』〈前掲〉所載——中井注』の訳者尾瀬敬止氏によれば、作者〔ピリニャークを指す——中井注〕の考えは、『リンゴの花は、古い屋敷にも咲く、大地の存続するかぎり、やはり咲くのだ』というのである。それでは、彼は懐旧の念を忘れなかったのである。しかし彼は、革命をまのあたりにし、身をもって経験し、ここには破壊があり、流血があり、矛盾がある、しかし決して創造がないのではないことを知った。そのため彼は決して絶望の心を抱かなかった。これはまさしく革命時代に生きている人の心である。詩人ブローク（Alexander Blok）もこのようであった。」

*17:『魯迅日記』(『魯迅全集』第14巻、1981)の1930年「書帳」の5月30日の日付の項に「ソ・ロ文学の展望一本 二・〇〇」とある。

*18:この本の邦訳には、もう一種ある。『ソヴェート文学の十年』(コーガン著、山内封介訳、白揚社、1930・12・15、魯迅入手年月日、1931・1・18〈『魯迅日記』1931年の書帳による〉)である。この二種類の本について、『魯迅目睹書目 日本書之部』(中島長文編刊、1986・3・25)に詳しい。

コーガン教授について、またコーガン教授の魯迅に対する影響については、今後の課題とする。

*19:魯迅は、『『十月』后記』(1930・8・30、『訳文序跋集』)で次のように言う。「ヤコブレフについては、その芸術的基調が、すべて博愛と良心にあり、しかも大変宗教的で、ときにはまったく教会を尊崇しているほどである。彼は農民を人類の正義と良心の最高の保持者と考え、彼らだけが全世界を友愛の精神に結びつけることができるとする。この見解を具体化したのが、短篇小説『農民』であって、その中には〈人類の良心〉の勝利が描かれている。」

*20:『新興文学全集』第24巻露西亜篇Ⅲ(平凡社、1928・8・5)に、「百姓」(ヤコヴレフ、岡沢秀虎訳)が収められている。

*21:魯迅は『『農夫』訳者附記』(1928・10・27作、前掲)で次のように言う。「この『農夫』にいたっては、もちろんさらにはなほだしい。革命の気風がないばかりか、濃い宗教的気配、トルストイ的気配を帯びている。私の〈落伍〉した目から見ても、ソビエト政権下で、このような作者をなお留めておくことは奇異である。しかし私たちはこの短い一篇から、ソ連が人道主義を排斥しようという理由を悟ることができる。なぜならこのように温厚であることは、革命においてであれ、反革命においてであれ、必ず失敗することは疑いないからである。他人は決してこのように温厚ではなく、人が熟睡しているときに、銃剣の一撃をお見舞いしないであろうか。だから〈非人道主義〉の高唱が起こるのは、必然の勢いである。」

*22:魯迅は『『豎琴』后記』(1932・9・10)で次のように言う。

「彼の本質は、純粹に農民的、宗教的である。彼の芸術の基調は、博愛と良心である。彼は農民が人類の正義と良心の保持者であると考え、かつただ農民だけが、ほんとうに全世界を友愛の精神に繋げるものであると思っている。この『貧しき人たち』は、『近代短篇小説集』の八住利雄の訳本から重訳したもので、展開するところは自ずから人々が互いに助け合い慈しむ精神である。すなわち作者が信仰する〈人間性〉であるが、しかし想像の産物である。」

*23:「对于左翼作家聯盟的意見」(1930・3・2講演、『萌芽月刊』第1卷第4期、1930・4・1、『二心集』)で魯迅は次のように言う。

「もしも革命の実際の状況を分かていなければ、容易に〈右翼〉に変わります。革命は苦痛なもので、その中には必ず汚穢や血が混じっており、決して詩人が想像するようなおもしろい、完璧なものではありません。革命はとりわけ現実のことであり、卑賤で面倒なさまざまな仕事が必要で、決して詩人が想像するようなロマンチックなものではありません。革命は当然破壊がありますが、さらに建設が必要です。破壊は痛快ですが、しかし建設は面倒なことです。ですから革命にロマンチックな幻想を抱いている人は、いったん革命に近づき、革命が進行することになると、失望しやすいのです。聞くところによると、ロシアの詩人エセーニンも、当初非常に十月革命を歓迎し、当時彼は、『万歳、天と地の革命よ!』と言い、『私はボリシェヴィキになった!』とも言いました。しかし革命後になると、實際上の状況は、彼の想像することではまったくなく、ついに失望し、退廃しました。」

「事実、労働者大衆は梁実秋の言う〈見こみのある〉ものでありさえすれば、決して知識人階級を特別重視するはずがありません。例えば私が訳した『毀滅』中のメーチック(知識人階級出身)は、かえっていつも炭鉱労働者に嘲笑されます。言うまでもなく、知識人階級にはやらなければならない知識人階級のことがあって、特に軽視すべきではありません。しかし労働者階級には決して、特に例外的に詩人や文学者を優遇する義務はないのです。」